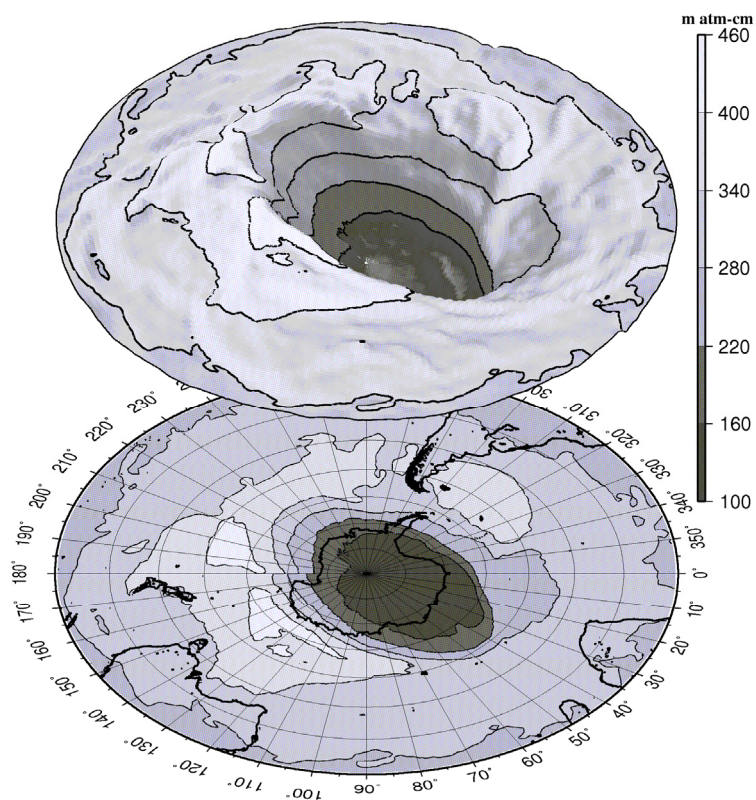


オゾン層観測報告：2006

ANNUAL REPORT OF OZONE LAYER MONITORING : 2006



2006年10月17日の南極オゾンホール

平成19年3月

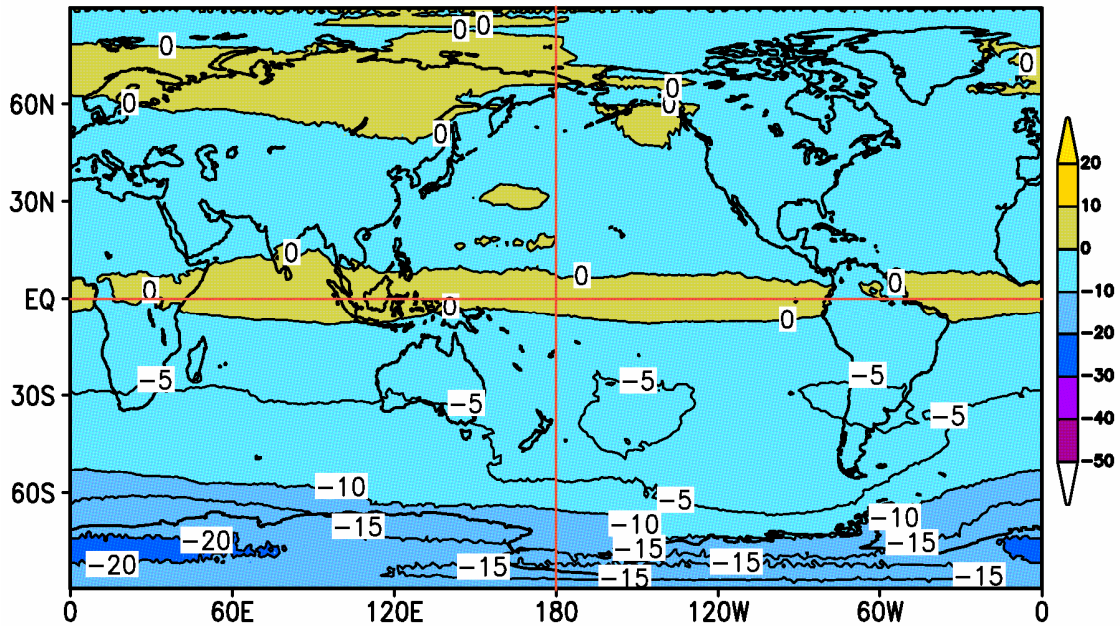
March 2007

気象庁

Japan Meteorological Agency

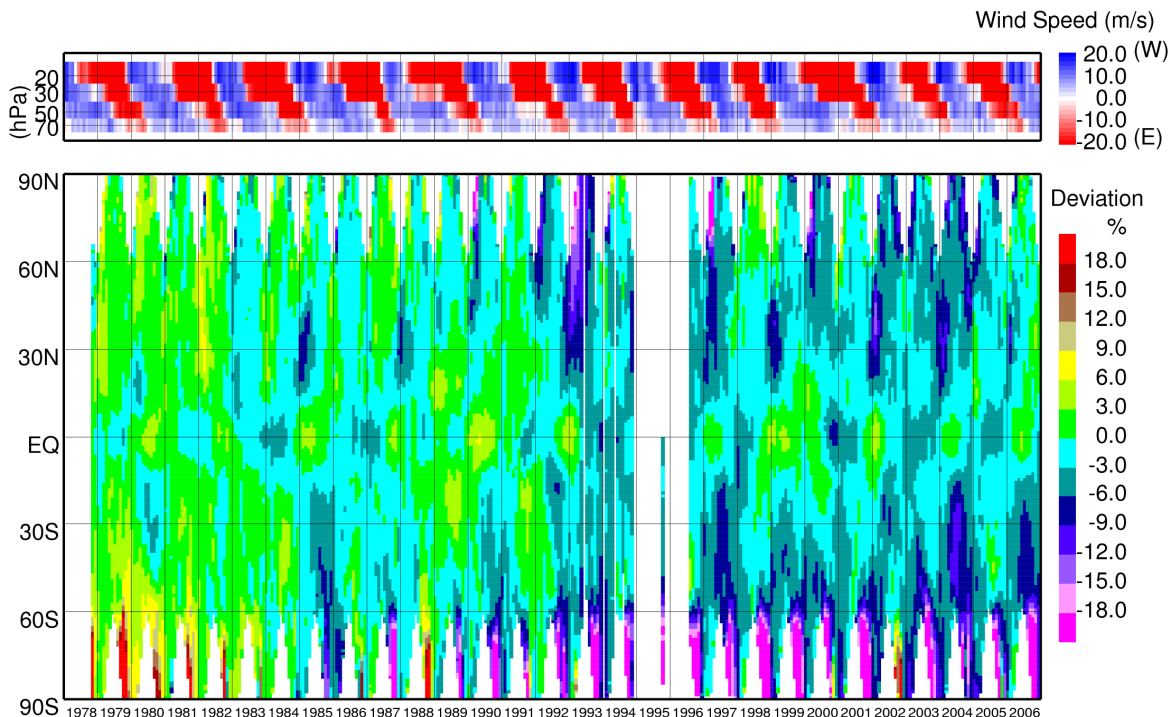
表紙の図：2006年10月17日の南極オゾンホール

南極昭和基地においてオゾン全量の日代表値が過去最低となった2006年10月17日におけるオゾン全量分布図。米国航空宇宙局(NASA)提供の衛星データをもとに気象庁で作成。上段の図は、オゾン全量を高度座標に置き換えた鳥瞰図。目安として220 m atm-cm以下の領域がオゾンホールとされている。



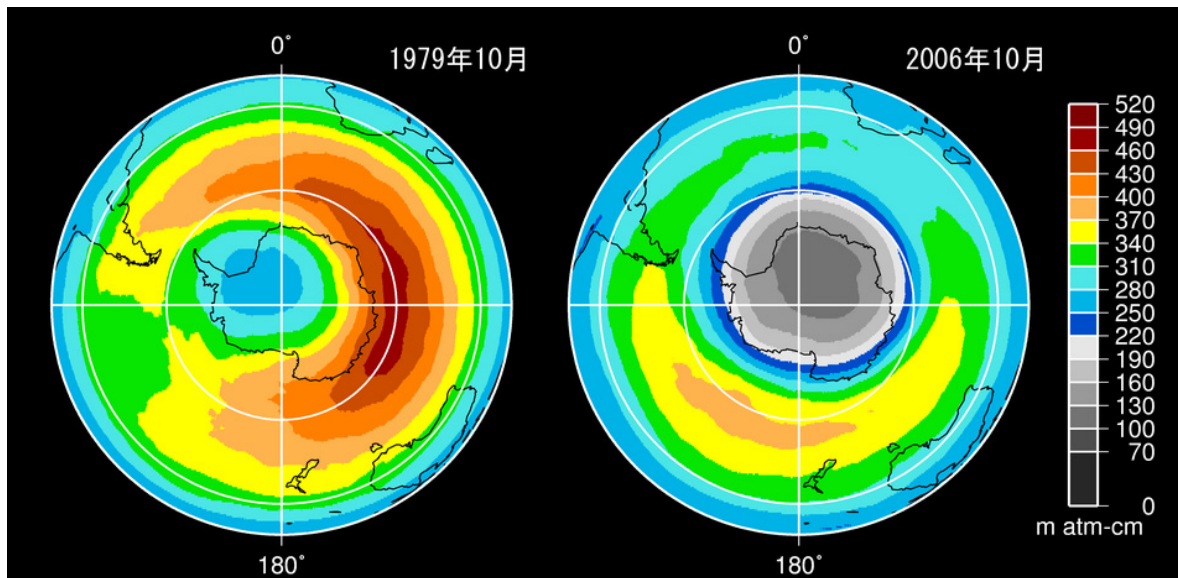
口絵1：2006年のオゾン全量比偏差(%)の全球分布

月平均オゾン全量比偏差(%)の2006年平均分布。等値線間隔は5%。比較の基準である参照値は1979～1992年の平均値。北緯60度以北の1月と11、12月及び南緯60度以南の5～7月は、太陽高度角の関係で観測できない時期があるため省いて計算した。米国航空宇宙局(NASA)提供の衛星観測データから作成。本文1-1-1項参照。



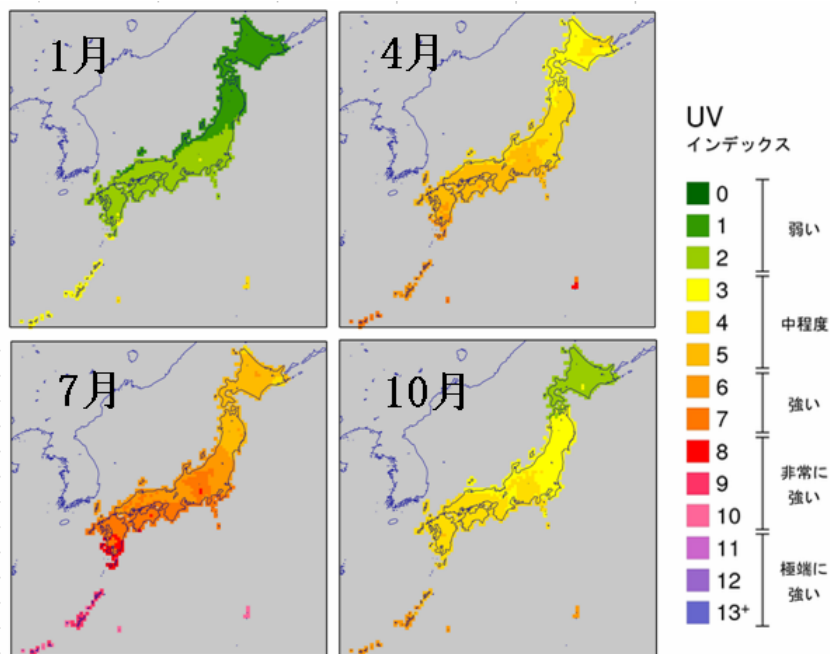
口絵2：シンガポール上空の東西風の変化と緯度別平均オゾン全量の増減との対応

上図はシンガポール上空の東西風の経年変化。下図は米国航空宇宙局(NASA)提供の衛星データをもとに、気象庁が作成した緯度別平均オゾン全量月平均値の年比偏差の経年変化。一般的に30～50hPaの風が西風の場合に、赤道付近のオゾン量が多く、逆に中緯度で少なくなるなど、東西風の変化と低緯度から中緯度のオゾン全量の増減が対応していることがわかる。本文の解説2「オゾン量の経年変動に影響を及ぼす自然の要因1」参照。



口絵3：南半球のオゾン全量分布

1979年及び2006年における南半球の10月の月平均オゾン全量分布。米国航空宇宙局（NASA）提供の衛星データをもとに気象庁で作成。本文1-3-1項参照。



口絵4：日本付近の日最大UVインデックスの月別分布

衛星による上空のオゾン量やアメダスの日照時間などのデータを用いて算出した日本付近の日最大 UV インデックスの月平均分布。1997年から2006年までの期間の1、4、7、10月についての月別平均値。紫外線量は地域、季節によって大きく異なる。本文の解説7「紫外線についての知識」参照。